

坂本晃三は、地下街を落ち着いた足取りで巨大書店へ入っていった。

迷うことなくたどり着いた歴史関係のコーナーで色々な本を手に取って見ている。そして、短時間で五冊ばかりの本を選び購入していった。

僕は坂本晃三が本を物色していた場所へ駆け寄り、先ほどまで坂本が手に取っていた本を確認した。それは古代エジプトについて書かれた本であった。

特に不思議なことではない。なぜなら坂本晃三は奈良史跡文化研究室の研究員、それも主席研究員だから。

しかし何故、日本の史跡を研究する者が古代エジプトの本に興味があるのだろうか。

まあいい。僕は坂本晃三を尾行しなければならぬ。周囲を確認し、極力自然に振る舞いつつ、坂本の姿を探した。

坂本は書店の出口から右に曲がろうとしていた。僕は慌てて後を追ったが、どうやら見失ってしまったようだ。まだそんなに遠くに行っているはずがないので、足早に人混みをかき分け歩いていく。

そして十字路を左に曲がろうとしたとき、僕は人とぶつかってしまった。

「どうもすいません。大丈夫ですか？」

平謝りしつつも坂本晃三の姿を探し続けた。

「やあ、こちらこそ失礼した。おや、あなたは先日奈良駅でお会いした方ではないですか
僕は『しまった』と思いつながらにも平静を装うのが精一杯だった。

「奇遇ですな。こんな所でまたお会いするなんて」

坂本晃三は笑顔で言った。

僕は内心パニックになっっている。尾行しているのがばれてしまったかもしれない。何かうまい言葉を返さないといけないと思うと余計に焦ってしまう。

「そういえばあなた、あそこの書店でエジプトの本を見ておられましたよね。興味がありませんか」

坂本晃三は書店の方を眺めながら言った。

「えっ、いや。そういう訳ではないのですが、たまたまエジプトの本が目に入っただけでして
僕は取り繕うのに必死だった。

「でも、嫌いではないです。ピラミッドは好きですね。謎めいていて」

僕は嘘を言っている。鼻の頭が俄に汗ばんだ。

坂本晃三は最高の笑顔で言った。

「どうです。お時間がありなら、お茶でも一杯やりながらエジプトのお話でも・・・。こう
見えても私、一応学者でしてな」

地下街の中央にある喫茶店。ガラス張りの落ち着いた店だ。

坂本晃三は、十九歳の時に初めてカイロに行つたときのこと、ピラミッドの破片を盗み帰つてきたことなど、面白可笑しくかつドラマティックに話をしてくれた。

きつと頭が良いに違いない。とても分かりやすく、飽きさせない。また、出で立ちからして上品であるので語る内容も普通ではないワンランク上の話に聞こえる。

喫茶店のガラス張りの向こうはすぐ通路になっている。ひっきりなしに人が通るが、店の中までその雑踏は届かない。

「私は思います。すべてのルーツはただ一つ。全世界に広がる様々な文化も、遡つていくとある一つの文化に辿り着く。日本の文化も遙か昔、シルクロードから伝わってきたことは事実です」

何を言わんとしているか理解できなかつた。

僕は尋ねた。

「何故、奈良史跡文化研究室にお勤めされているのですか」

坂本晃三の視線が止まつた。

「どうしてご存知なのですか」

顔は優しく微笑んでいるが、眼差しは鋭かつた。しばらく考え込んでから坂本晃三は言った。

「うむ・・・。そんなことはどうでもよいことかもしれない。最も重要なのは、今こうして私とあなたが出逢ってしまったことなんです」

僕は増々理解できなくなってきた。

しばらく沈黙が続いた。地下街からはオレンジレンジの曲が微かに聞こえる。

流行歌には、勢いと裏腹に切なさを感じるのは僕だけだろうか。

「近いうちに一度、研究室にお出でになりませんか。奈良時代の歴史や文化も面白いものです。いつでもいい。時間があればこちらに連絡ください。いつでも歓迎しますぞ」

スーツの内ポケットからモダンなアルミの名刺入れを取り出した坂本晃三は、一枚の名刺をテーブルの僕の真正面に差し出した。

#15

「お帰りなさい。晩ご飯できているからね」

サヤカはキッチンから顔を出して微笑んでいる。

僕は、洗面台に行き手を洗い、うがいをする。

鏡に映る自分の顔は、明らかに老けてきている。心は若いつもりでいるが、時間は無情なまですぐに流れ続けているのである。

「実はね、昨日少し変わった紳士と仲良くなつてね」

席に着くなり昨日の出来事をすべて話した。サヤカは僕の眼をじつと見つめながら話を聞いてくれた。

実はサヤカに今日の話（坂本晃三と出逢つた話）をするのは、よしの方がいいかと考えた。何故なら、僕が会社をずる休みしたということと、何かに巻き込まれつつありそうな予感があったから。

でも、サヤカだけには話しておいた方が良くと判断した。僕に万が一のことが起こったときのことを考えて。

「へえー。面白そうな紳士だね」

眼をクリクリにしたサヤカは興味津々だ。

「奈良史跡文化研究室つてうちから近いよね。転職してそこに勤めさせてもらったら」
冗談まじりにサヤカは言った。

本当にこの子は良い人だ。いつも人の話を真剣に聴いてくれるそんな性格が大好きだ。でも、一つだけ話していいことがある。

それは、実質的に奈良史跡文化研究室へ招待されたことだ。

翌朝、いつもの電車に乗り込む。

指定席に座り発車を待っている。

彼女もやってきた。相変わらず腕時計にシーマスターをしているようだ。

今日は、ベージュ色で太腿にスリットの入ったスカートと白いコットンシャツを合わせていた。

相変わらず、清潔でいながらも男の眼を惹きつけるお洒落なファッションだ。

彼女はきつちりと閉じた両膝の上にバッグを置き、腕時計を見たとき僕と目が合った。

僕はじろじろ見ているつもりはないが、あまりにも女性らしく美しい彼女に幾度となく視線をやってしまったことに罪悪感と照れくささのようなものを感じ、思わず俯いてしまった。

下心がある訳じゃない。ただ、美しいから見てしまっただけ。

本心から、今現在僕にとつての女性はサヤカしか存在しない。性格から外見、声も匂いも全てにおいて愛しているし、充分だから。

シーマスターの彼女も美しいが、女性として僕の興味から外れてしまう。

そんな言い訳じみたことを考えていると、僕の足下に濃紺の円筒が転がってきた。

口紅のキャップだ。僕は、それを拾い上げようかどうか躊躇する。

女性だけが使うことを許された口紅という男にとつて非常に悩ましい過ぎる道具の一部が足下に転がって着たからといって、そう簡単に手に取ることは恥ずかし過ぎる。

子供の頃なら本当の親切心で拾い上げることは容易いが、汚れて壊れかけの僕にとつてはそ

んなことすらとても難しい行動なのである。勘違いの羞恥心とでもいうのだろうか。

ましてや、今この電車には僕と彼女しか乗っていない。従って、悩ましい濃紺のキャップは明らかに彼女のものなのだ。

一瞬間が止まっているような感覚の中から、声が聞こえた。

「すいません。・・・ほんとうにごめんなさいね」

気がつくとも僕は悩ましいキャップを拾い上げて、彼女の白い指先へ滑り込まそうとしていた。僕はなんだか胸がムズかゆくなる。何故だろうか。

後から気付いたことなのだが、それは彼女の声が想像していたよりも低く、とても大人っぽい印象を僕に与えたことと、仄かに香る香水のせいだった。

続く